

黙示録4章「天の御座」

1A この後に起こる事 1

2A 神の御座 2-7

1B 座っておられる方 2-3

2B 二十四人の長老 4-5

3B 四つの生き物 6-7

3A 礼拝 8-11

1B 永遠に生きておられる方 8-9

2B 栄光と誉れと力 10-11

本文

黙示録4章を開きましょう。私たちは、2-3章において七つの教会に対する主の言葉を読んできました。私たちは、使徒ヨハネが後ろから聞こえる大きな声に反応して振り向いたら、そこに栄光の姿が輝く主イエスさまがおられました。そして、「あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書き記せ。(1:19)」と命じられました。ヨハネが「見た事」とは、その栄光に輝くイエス様の姿です。そして、「今ある事」は、今ある七つの教会です。そして、「この後に起こる事」と言われました。それが、4章からの出来事になります。

つまり、4章以降は教会の後のことでもあります。私たち教会は、絶えず「自分たちは、いつか取り去られる時が来るのだ。」ということ意識していないといけません。この世には属していません。この世に置かれている神の教会なのですが、地の塩として、世の光としての役割を果たしたのであれば、主はご自分の時にそれを取り除かれます。「不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があって、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。(2テサロニケ2:7)」ですから、私たちは霊の戦いの最前線に置かれています。不法の秘密が働いているけれども、それを引き止める働きをしています。ですから、いつも目を覚まして祈っていないといけません。そして、その働きがいつか地上では終わりの時があり、それから主がこの地上に不法の人を現すようにされて、福音の真理に従わなかった者たちに対して、悪魔に惑わされるままにし、この世を裁かれます。私たちは、4章から地上にキリストが再臨される19章に至るまで、その神の怒りの表れを読むことになります。

1A この後に起こる事 1

1 その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。また、先にラツパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声があった。「ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう。」

「その後、私は見た。」とヨハネは言っています。そして、「見よ。」という言葉から始まります。ヨハネは、この言葉を数多く使っています。黙示録の書き出しにも、「ヨハネは、神のことばとイエス・キリストのあかし、すなわち、彼の見たすべての事をあかした。(1:2)」とあります。これは、肉眼で見ることのできるものではなく、霊の眼で見ることのできるものであります。これからヨハネは、天における情景を見ますが、御霊の啓示なしには天の姿を見ることはできません。使徒パウロは言いました。「2コリント 4:18 私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」預言者エリシャは、自分のしもべに、アラム軍が神の御使いの軍勢に取り囲まれているのを見せました(2列王 6 章)。イザヤは、エルサレムとユダを強く糾弾しましたが、天の御座の情景を見て、自分こそが汚れている者であることを嘆きました(6 章)。そして、私たちはエゼキエル書を完読しましたが、エゼキエルは初めに、天の光景を目撃したところから始まりました。このように、私たちが証し人となるということは、目に見えないものを見るようにしてこの地上を歩む、天に属するものを見分けて、神の御心を知ることが極めて重要になります。

そして、ヨハネが見ると、「天に一つの開いた門があった」とあります。地上に住んでいる者たちのところに、天が開けるという出来事が聖書には何箇所にもありますが、例えば、「マタイ 3:16 こうして、イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の御霊が鳩のように下って、自分の上に来られるのをご覧になった。」とあります。イエス様が公生涯の歩まれる時、それはまさしく天が地に開かれたということでしょう。ステパノが殉教する時も、「使徒 7:56 見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」とあります。殉教をする聖徒たちは、このように死ぬ直前に天が開かれているのを見る人たちがいるのかもしれませんが。そして異邦人宣教に使徒たちを召される時、ペテロに対して大きな敷布に動物がいるのを主が見せた時、「天が開けており、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来た。(使徒 10:11)」とあります。

そして、「先にラッパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声」とありますが、それが、イエス様が栄光の姿で現れた時に、ヨハネを呼びかけられた声であります(1:10)。ラッパの音であります。これは、イスラエルに対して、荒野の宿営の時にラッパを吹き鳴らして、出発するときの合図、また戦いのための召集される時の合図として使われます(民数 10 章)。それは、新約時代には、教会に対して主ご自身が、御使いによるラッパによって私たちを呼び集める時に使われます。「1テサロニケ 4:16-17 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らと一しょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」そして黙示録 8 章以降には、御使いの軍勢に対して、七つのラッパが吹き鳴らされ、地上に対する戦いを行う場面が出て来ます。ここでは、教会が引き上げられる、携挙されるのと同じような、天に対して招き入

れられるラツパの音でありました。「ここに上れ。」と主は言われます。

2A 神の御座 2-7

1B 座っておられる方 2-3

2 たちまち私は御霊に感じた。すると見よ。天に一つの御座があり、その御座に着いている方があり、3 その方は、碧玉や赤めのうのように見え、その御座の回りには、緑玉のように見える虹があった。

ヨハネは、パトモス島にいながらにして天に引き上げられる体験をしました。これはちょうど、預言者エゼキエルが、バビロンのテルアビブという離散の地にいながらにして、御霊によって引き上げられてエルサレムの神殿にまで連れて行かれたのに似ています。

そしてそこには、「一つの御座」がありました。ここが第四章のテーマです。この世界には、自分の世界には、神が御座に着いておられるという、ものすごい大事な真理があります。天において、そこが一体どんなところなのだろう？という疑問や想像をしておられる方は、「天は、神が王座に着かれています、世界を支配しておられる所」と思ってください。しばしば、誰が救われるのか？天国に誰が入るのかどうか、という議論がありますが、主なる神が全てを支配しておられるということを楽しんで受け入れていない人にとっては、天の御国は最も居づらいところです。神の王座、玉座があるのです。

黙示録には、また聖書を通じて、御座についての幻が数多くあります。天の御座、神の御座、栄光の御座、恵みの御座、ケルビムの上の座、大きな白い御座など、数多くあります。「詩篇 11:4 主は、その聖座が宮にあり、主は、その王座が天にある。その目は見通し、そのまぶたは、人の子らを調べる。」「103:19 主は天にその王座を堅く立て、その王国はすべてを統べ治める。」どんなことがあっても、どんなことが起こっていても、主が全てのことを支配しておられ、動かしておられ、ご自分の思うままにしておられます。この根本真理を受け入れている人は、信仰が安定します。ヨブも結局は、あれだけの苦しみがあつたのにそれでも立ち直れたのは、主が御座におられることを、その主権と権威を知っていたからです。

そして主ご自身の御座のところは、「碧玉や赤めのうのように見え」とあります。碧玉というのは、青白いダイヤモンドのような宝石です。赤めのうは、血のような赤色の宝石です。神の栄光の輝きですが、宝石による輝きは旧約のときからずっと啓示されていました。出エジプト記 28 章には、大祭司の装束についての主の命令が書かれています。大祭司は胸当てを着けなければいけません、その胸当てに宝石がはめ込まれます。こう書いてあります。「28:17-20 宝石をはめ込み、宝石を四列にする。すなわち、第一列は赤めのう、トパーズ、エメラルド。第二列はトルコ玉、サファイヤ、ダイヤモンド。第三列はヒヤシンス石、めのう、紫水晶、第四列は緑柱石、しまめのう、碧玉。

これらを金のわくにはめ込まなければならない。」最後の石である碧玉と最初の石である赤めのうを、ヨハネは、神の御座の輝きとして見ていますね。そして、エゼキエル書 28 章には、ツロの王に対する預言として、その背後に働くサタンの姿が描かれています。「28:13 あなたは神の園、エデンにいて、あらゆる宝石があなたをおおっていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、しまめのう、碧玉、サファイヤ、トルコ玉、エメラルド。あなたのタンバリンと笛とは金で作られ、これらはあなたが造られた日に整えられていた。」これは墮落する前の悪魔の姿ですが、神のすぐそばにいて、神の栄光の輝きをもって輝いていました。このように、神の御座は光り輝いています。黙示録21章に登場する天のエルサレムは、宝石による十二の土台石によって造られています。

そして次に、「緑玉のように見える虹」とあるのですが、碧玉である青、赤めのうの赤、そして緑を合わせると、光の場合には白になります。つまり、これらは神ご自身が光の中に住まわれていることを表しています。「1テモテ 6:15-16 その現われを、神はご自分の良しとする時に示してください。神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることもできない方です。誉れと、とこしえの主権は神のもので。アーメン。」

そして、「虹」であります。これはエゼキエル書 1 章において、主なる神の御座のところにも出ていた情景でありました。「1:28 その方の回りにある輝きのさまは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、それは主の栄光のように見えた。私はこれを見て、ひれ伏した。そのとき、私は語る者の声を聞いた。」エゼキエル書において、神のエルサレムに対する裁き、バビロンによって滅ぼされる預言が始まり、しかし神殿が破壊された後に主がそれを建て直す約束を与えられました。神が裁きも行われても、ご自身の契約と約束をイスラエルに対して守られることを示したものでした。ノアに対しての契約において、虹が印となっていたのもそのためです。水による裁きを主が行なわれたけれども、決して人を滅ぼすことはないという約束を確信させるものでした。黙示録において、これから地上に裁きを神が下します。しかし、御国をもたらずという約束を必ず果されます。私たちの中で、いかに困難があっても、また混乱や混沌としていても、主が必ず約束を守られる方であることを思い出すことは大切です。

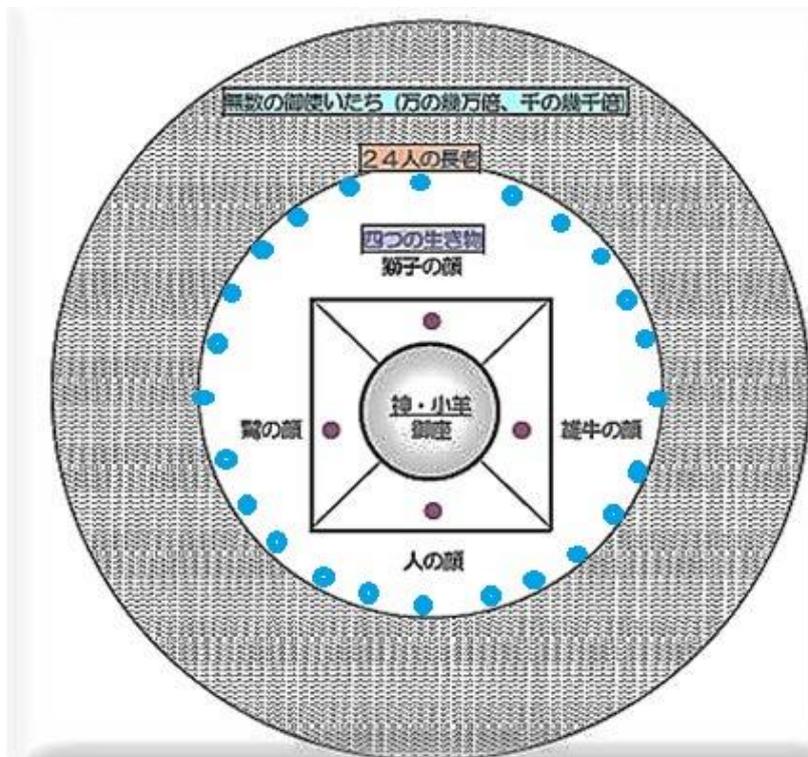
2B 二十四人の長老 4-5

4 また、御座の回りに二十四の座があった。これらの座には、白い衣を着て、金の冠を頭にかぶった二十四人の長老たちがすわっていた。

御座の光景であります。御座の中心と回りに宝石のような輝きがあり、そしてそのさらに周囲には、「二十四の座」があります。彼らは誰なのでしょう？彼らは神ご自身と同じように着座しています。もちろん、神よりも劣った座です。そして、白い衣を着ています。黙示録の中で白い衣を着た人々は、小羊の血によって洗われたので白くされているとあり(7:14)、罪を贖われ、義を身にま

とった人々です。そして、冠をかぶっていますが、スミルナの教会やフィラデルフィヤの教会に、冠を与える約束をイエスさまがしています。王冠ではなく、競走によって獲得する選手の冠のような冠です。スミルナの教会や、使徒たちの手紙に、冠が報いとして与えられることがたくさん書かれていましたね。彼らが、地上から贖われた者たちの代表であると言えます。

「長老」というのは、人々を治める指導者です。イスラエルの民にも、また教会にも長老がいました。そして出エジプト記には、モーセが契約の血をイスラエルの民に注いだ後に、長老たちとともにシナイ山に上ったことが書かれています。24章 9-10 節ですが、こう書かれています。「それからモーセとアロン、ナダブとアビフ、それにイスラエルの長老七十人は上って行った。そうして、彼らはイスラエルの神を仰ぎ見た。御足の下にはサファイヤを敷いたようなものがあり、透き通っていて青空のようであった。」イスラエルの民は神がおられる御座のところで、御足の下にあるサファイヤを敷いたようなもの、透き通った青空のようなものを見ました。黙示録 4 章 6 節では、「水晶に似たガラスの海のようにであった」と形容されています。ですから、基本的に同じ光景です。したがって、神の御座において、贖われた者たちの代表がここにいるのです。また、「二十四人」という数字は、歴代誌第一 24 章に出てきます。祭司たちが組になって分けられており、その組の数が 24 になっています。教会は、「祭司の王国」と 1 章で呼ばれていましたから、これらが地上から贖われた者たちの代表であると言えます。そして、彼らが天に住んでいる者たちの真ん中において、礼拝を御座の前で捧げるのです。私たちが、いかにこの地上において礼拝によって、人々の前に立たなければいけない存在であるかを教えられます。¹



5 御座からいならずと声
と雷鳴が起こった。七つ
のともしびが御座の前で
燃えていた。神の七つの
御霊である。

4 章では、「御座」との
位置関係、その前置詞が
大事になりますね。ここ
では、「から」という言葉
が使われています。先は
「回り」とありました。後で、
「前」という言葉が使われ
ます。それで御座がどの
ようになっているのかを

¹ http://meigata-bokushin.secret.jp/swfu/d/auto_kdo66n.pdf

想像できます。ここでは、御座から「いなずまと声と雷鳴」が起こっています。これから黙示録で 8 回も、そのような光景を目にすることになります。これは、主の聖なる姿、畏れ多い姿の顕現です。シナイ山のところに、天から主が降りてこられた時に、イスラエルが恐ろしくなったことを思い出してください。「出エジプト 19:16 三日目の朝になると、山の上に雷といなずまと密雲があり、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。」結局、終わりの日における神の裁きというものの本質は、「神の聖なる姿、また畏れ多き姿」を知るということでしょう。ペテロが、第一の手紙でそのことを教えていましたね。「1:15-17 あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行ないにおいて聖なるものとされなさい。それは、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない。」と書いてあるからです。また、人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を、恐れかしこんで過ごしなさい。」

そして、「七つのもしびが御座の前で燃えていた。神の七つの御霊である。」とあります。聖なる御霊が、灯として表れています。聖霊が火によって現れています。バプテスマのヨハネが、神の裁「きが地上に降ることを、「聖霊と火によるバプテスマ」と言いましたね。

3B 四つの生き物 6-7

6 御座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。御座の中央と御座の回りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。7 第一の生き物は、ししのようにであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空飛ぶわしのようであった。

御座の前には、「水晶に似たガラスの海」があります。黙示録 15 章 2 節にもそれができます。「私は、火の混じった、ガラスの海のようなものを見た。獣と、その像と、その名を示す数字とに打ち勝った人々が、神の立琴を手にして、このガラスの海のほとりに立っていた。」神が地上に火による裁きを行なっているのですが、ガラスは透明なので、その火の様子が天にも届いています。昔は、王が自分の玉座の前に、似たようなものを作っていたそうです。王とその臣民と隔てるためにそうしていました。それによって王の威厳と偉大さを表していました。神の聖なる姿、そして透明なところに表れている神の清さが示されています。

そして、「御座の中央と御座の回りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。」とあります。7 節の姿は、まさにエゼキエル書 1 章と 10 章に出て来たケルビムの姿と似ています。また、イザヤ書 6 章には、セラフィムが出てきて、8 節を読むとセラフィムにも似ています。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」と御座の前で叫んでいました。ケルビムですが、モーセの幕屋においても、ソロモンの神殿、そしてエゼキエルの見た神殿の幻においても、いつでも登場した天使長です。御座の中央と回りに、礼拝している天使長、そして天における礼拝全体を導く天使長であります。これからもこの四つの生き物が、天において礼拝を導いている様子を見ることになります。

7 節に、それぞれの顔があります。エゼキエル書 1 章には、一つのケルブに四つの顔がありましたが、ここではそれぞれ一つの顔です。天における情景なので、同じケルビムでも、その見た角度によって、あるいはケルビムが様態を変えるのかもしれませんが、その違いがあります。そして、それぞれの意味ですが、最も考えられるのは、「被造物の長」だということです。獅子は、獣の中での長です。そして雄牛は、家畜の中での長であります。そして人間はもちろん、神のかたちで造られた被造物の長です。それから、鷲は鳥における長です。初代教父は、これを四つの福音書の特徴であると話してきました。獅子はマタイの描く王なるキリスト、雄牛はマルコの描く僕なるキリスト、人間はルカの描く人としてのキリスト、鷲はヨハネの描く神の子としてのキリストということです。

3A 礼拝 8-11

1B 永遠に生きておられる方 8-9

8 この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。」

四つの生き物は、神のすぐそばにいたのでその栄光を反映していますが、まず六つの翼があります。これは、二つで飛び、二つは体を覆い、二つは天に上げるために用いられます。まさに、礼拝の姿です。そして「目で満ちていた」というものです。すべてのものを見ている、あるいは知っているということです。神は全知です。すべてのことを知っておられます。

そして、「昼も夜も絶え間なく叫び続けた。」とあります。これは、天において疲れることはないことが分かります。主は疲れる方ではなく、まどろむこともない方です。「詩篇 121:4 見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。」そして、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」というのは、神の聖さを強く強調しています。神はすべての汚れから隔絶された方であり、被造物と混じることは決してありません。イザヤ書ではセラフィムも、「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満つ。(6:3)」と叫んでいます。三つ並べて神を呼びかけるのは、ヤコブがヨセフを祝福する時も、アロンがイスラエルを祝福する時もありました。しばしば、これが三位一体の神、父、子、聖霊の神を強調しているとも言われます。

そして、「万物の支配者」です。これが、黙示録において、また主が天において御座におられることについての全てと言って良いでしょう。黙示録にこの呼び名が何度も出て来ます。主が万物の支配者だということをいかに受け入れ、それで礼拝するのか？というのが、被造物に課しておられる神の問いかけであります。このことを受け入れない者たちが、地上において災いを受けていく姿を、これから見ていきます。

もう一つ、「昔いまし、常にいまし、後に来られる方」であります。この呼び名も黙示録には数多く出て来ます。これは、主が永遠なる方、時空を超えた方であることを示しています。イエス様は、「アブラハムの前に、わたしはある。(ヨハネ 8:58 参照)」と言われましたが、それは、モーセに主が現れた、「わたしは、『わたしはある』という者である。」と言われたことを意識しておられたものです。わたしはいた、ではなく、わたしはある、のです。「永遠の福音」という言葉が14章6節にあり、また、いのちの書が、「世の初め」から書き記されていることが13章8節に書かれています。伝道者の書には、人は永遠を思う思いを神から与えられたとあり、それは私たち人間が永遠の神によって造られているからです。そして、神の御国についても、「主は永遠に支配される(11:15)」とあります。

9 また、これらの生き物が、永遠に生きておられる、御座に着いている方に、栄光、誉れ、感謝をささげるとき、

生き物が、「永遠に生きておられる、御座に着いている方に」捧げているものは、「栄光、誉れ、感謝」です。「栄光」というのは、どのような意味なのでしょう？もともとは「重さ」という意味ですが、重力のように、重いところに物が引き寄せられます。同じように、神ご自身にすべての原因や目的が集められるときも、それが栄光となります。パウロは、ローマ11章で、「というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。(36 節)」と言いました。すべてのことが神から発し、神によって成り、神に至ることを認めるときに、神に栄光をささげることになります。そして誉れとなるものも、主にお返しし、感謝も捧げます。そしてこの四つの生き物に呼応して、24人の長老も礼拝します。

2B 栄光と誉れと力 10-11

10 二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。

彼らの行なっていることは、第一に「ひれ伏す」ことです。これは、自分の思いや願い、全てのことを主なる神に服従することです。ムスリムの人たちが礼拝する時に、全て寝そべってしまうほどひれ伏しますが、王なる方に対して行なうのはこの姿勢です。私たちはあまりにも、自分の権利を当然と考えて、自分の思いや願いを第一にすることを主張します。いいえ、主に対して従順であること、服従することが全ての中心なのです。次に、「拝み」ます。これは、自分の靈魂のすべて、人格のすべてを相手に明け渡してしまうことです。魂を売り渡してしまった、という悪い言い方がありますが、私たちは善なる方に、自分の魂を明け渡してしまうのです。

そして、三つ目に、「冠を・・・投げ出」すことがあります。冠は、自分が神から与えられた報いである栄光でありました。それを主なる神の前では、全て投げ出してしまいます。私たちのものでは、

元々ありませんから、主なる神には栄光や報いは投げ出すのです。これが礼拝の姿です。ダビデが、ペリシテ人と戦って、部下である三人の勇士がベツレヘムから持ってきた水を、土に注いでしまいました。また、マリヤはイエス様が十字架に付けられる前に、高価な香油を主の足に注いでしまいました。自分のものに固執しない、主の御心であれば何でも投げうって渡してしまう姿です。

11 「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」

「主よ。われらの神よ。」という、クリスチャンがいつも使っていることばですが、もう一度その意味を考えてみましょう。「主」はもちろん、主人、あるいは自分が服従する相手です。この方が自分を支配する存在であることを認めることです。自分勝手なことをして、それで「主よ」と言っても意味がありません。次に、「神よ」とありますが、神とは名前ではなく、「自分を突き動かす情熱」と言い換えても良いかもしれません。自分が行なっていることを、行なわせているその情熱は何なのか。何が自分を突き動かしているのか？それが、お金であれば金が神です。それが名誉であれば名誉が神です。「主よ、われらの神よ」と言うときは、主に自分のすべてが任されている、自分が主によって突き動かされていることを告白しています。

そして、万物の支配者に対する告白を、「あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」と言っています。まずは、万物を創造された方であるということ。ゆえに、あなたの御心のゆえに、万物が存在しているということです。ここで、御心は、「あなたの喜び、好み」と訳すことができます。主がご自分の願われているように、思いのままに、ということ。つまり、神は私たちを喜ばすために存在しているのではありません。神はご自分を喜ばすために、私たちが存在しているのです。自分が喜ぶのではなく、神が喜ぶためです。

いかがでしょうか？ 私たちには、天に門が開かれる時がきます。その時は、私たちが信仰によって、御霊によってここで主を礼拝している、そしてそうした生活を歩んでいるその完成を見ます。黙示録は結局、変わらずに天の御座における礼拝と賛美で最後まで貫かれています。私たちの生活が、黙示録の生活でありますように。そして次回は、天における小羊なるキリストへの礼拝と賛美です。父なる神は全てを支配し、子なるキリストは全て信じる者を贖われる方であり、贖い主としてほめたたえられます。